
生

孤軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生

【Nコード】
N9020G

【作者名】
孤軍

【あらすじ】
死を望んだ少年の末路をどうぞおたのしみください

プロローグ

ただ漠然と生きるのがつらかった。何かやりたい物があるわけでもないし好きなものがあるわけでもない。

だけど、死ぬほど人生を悔いてるわけでもない。

何も起きない現状をただループさせる現実・・・・・・・・

自分が変わらなければ何も変わらない

でも変えるだけのきっかけもない

このままずっと生きていくのかと思うとぞっとする未来

だから僕は、死ぬことにした。

思えばそれが最初の選択だったのかもしれない。

出会い

見渡す限りの緑。呼吸をするだけでここが神聖な場所だということ
は、わかる

この場所は、年間100人はここで死ぬらしい。だからかあちこ
ちらに自殺を止める看板が見られる

「ここまで来ていまさらやめるなんてできるかよ」

そう自分に言い聞かせ、どんどん森の中を歩いていく。

「どうしたの」

誰もいないと思ってた場所でいきなり声をかけられるのは、驚いたが
その声の主を探すために後ろを振り返るが、その姿は、見えない

「な、なんだよ！誰かいるんだろ！」

静寂をかき消すように大声を上げるがその何者かは、返事をしない
俺は、恐ろしくなって森の奥のほうに急いで駆け抜けた

遠くから笑い声が聞こえてくる

ああ。。。。ここは、本当に着ちゃいけない場所なんだ。今
なら戻れるかもしれない。

でも、僕の足は、森の奥をひたすら目指した

しばらく走っていると広い広場に出た。その真ん中あたりには、荷
物が置いてあり誰かがいるようだったが今のところ姿が見えない
しばらくここで待っていれば帰り方を教えてくれるかもしれない
駄目だ。僕は、死ぬためにここにきたんだ！

「こんなとこで何してるの？」

後ろから声をかけられ、すぐに振り向く

「そんなにおびえちゃってかわいい」

「誰だよ。お前」

「あそこに荷物置いてるお姉ちゃんだよ」

麦藁帽を被っており顔は、あまり見えないが、服装や話し方を見た
限り、二十歳を越えているのだろう

「ねえ？なんでこんなところにいるの？」

「ま、まいごだよ」

少しもってしまっただが、不自然なほどではない。もしここで自殺をしようとしたことが分かればそのまま家に連れ戻されてしまう

「へえー自殺じゃないんだ」

何もかもを見透かされてるようなそんな感じがした。何かいわなきや。戻される。嫌だ

「あはははははは冗談だよ冗談」

笑いながら俺の肩を叩く

「今日は、もう日が暮れちゃうから、私たちといよ？で、お名前は？」

「玉置・・・・・・・・和也」

「和也君か。さぁおいで」

これが次の選択だ。ここですぐに断って逃げれたなら、もっと違う結果があった。あったはずだ。

団欒そして

「へえー和也。ここまで一人で着たのか」

食事を配りながら、大柄の男名前は、葛谷 敦

「家が近いからたまにくるんだよ」

「それで迷子ってあはははっは。可笑しい」

この笑い上戸の女は、袴田 葵

「そんなに笑ったら可哀想でしょ」

そして俺を救出してくれたことになっている 田辺 雅美

ご飯を食べながら、何気ない会話をした。学校や家でもあまり話さないからこんなに話したのは、本当に久しぶりだった。

ご飯を食べ終え、各自自分のお皿を片付ける

「そういえば、みなさんは、ここに何をしにきたんですか？」

「ふふふふふふ」

いきなり不気味に笑い出す敦

「今こそ、われらの正体を明かす時がきたのね！ 葵行くわよ」

「あはははははは。準備できてるよ！」

三人「我ら」

葵「オカルト」

敦「研究会」

雅美「ネクスト」

三人「ばーーーーーん」

・ ・ ・ ・ ・ 気まずい空気が流れた

敦さんは、得意げな顔でグリコポーズをとってこちらをずっと見ている。

「すっごーい」

棒読みであるが社交辞令を含め、感想をしたが

「やっぱりださいじゃない！！！！子供に気を使わせるほどださいってどういうことよ！」

「お前の立ち位置が悪いんだよ」

「オカルトでポーズってバカじゃないあはははははは」

ひとしきり怒鳴りあってから。ふいに敦さんが

「もうこんな時間だ。寝るぞ」

「明日何かあるんですか？」

「それは、ひ・み・つだよふふ」

それぞれ自分の寝袋に入るが僕がもっていないのをみた敦さんは、自分の分をよこしてくれた。悪いといったが無理やり着せられ、みんなで星を見ながら寝る

ふと目を覚ます、横にいるはずのみんながいない。こんな時間にみんなどこにいったのだろうか。

どこからか話し声が聞こえてくる。僕は、音を立てないようにそっと近づく

「えさが自分からきてくれるなんて助かったよな」

「最近お肉なかったもんね」

「あはははは、翔太の肉切れちゃったとこだから嬉しいねえ」

翔太・・・・・・・・・・・・・・・・って誰だよ。にんげ・・・・・・・・ん・・・・・・

じゃあ自分からきたって・・・・・・・・お肉って・・・・・・・・目の前が真っ暗になった。急に体がふらつく
パキッ

「誰だ!!!!!!」

僕は、すぐに走り出す。殺されちゃう。嫌だ！死にたくない
急いで広場に戻り、適当なバックを掴む

敦の声がどんどん近づいてくる

早く逃げないと、どっちに、どっちにいけばいいんだよ!!!!

「右」

たしかにそう聞こえた。何がなんだかわからないがとりあえず右に全力で走る

その間も敦の声が聞こえる。なんていつているか聞こえないが、とにかく逃げた。体力の続く限り
しだいに声は、聞こえなくなったが僕は、走るのをやめなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9020g/>

生

2010年10月15日21時04分発行